ブラックスキル

KARO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブラックスキル

【Ｎコード】
Ｎ２２２３Ｉ

【作者名】
ＫＡＲＯ

【あらすじ】
能力者が住む世界
それ以外はなにも変わらない世界、
能力者の学校があって時たま化け物が現れたり
能力者の大会があったり政府（政府特別能力部隊）という能力者の戦闘部隊以外は普通の世界

能力者（前書き）

能力を持たない人間は彼らの力を畏怖の念をこめてこう呼んだ

”ブラックスキル”と

能力者

「覚悟はできてんだろうな？」

とある空き地の真ん中で顔中傷だらけの厳つい大男が犬歯を剥き出しにして正面の見た目美少女の赤髪少年を睨みつける。

「…ふ…ぁ……、お前相手に覚悟がいんのか？」

少年は動じた様子もなく欠伸混じりに返した

もちろんその少年の態度に大男は絵に描いたような青筋をたてた

「じょうとぉ〜…」

そして野球のピッチャーのように拳を振りかぶり少年を睨みつける

……そして

「っだぁ！！」

【ォン！】

「…っと…」

投げるようなフォームと同時に握り拳型の土の塊が少年目掛けて高速で飛ぶ。

しかし少年は特に興味も示さずにその塊を少し首を動かすだけの動きでなんなく避けた。

「まだぁまだぁまだぁ！！！」

【ォン！、ォン！、フォン！、ォン！】

大男もそれに怯んだ様子は見せずに今度は連続で塊を飛ばす

「…たる……」

さすがに避ける隙間がない（避けるのが面倒くさい）のか少年はその塊に手を向けて目を細くひそめる。

「…っい…」

【ヴァッ！！】

少年が力を入れた瞬間に少年の手が赤い炎を纏う

「っての…」

そして手を前に突き出すのとほぼ同時に炎は塊に向かって放出される

【ドッ！！】

そして塊と炎がぶつかった瞬間爆発した

「っ！？」

大男は爆発に一瞬面食らったがすぐに爆発で巻き起こった砂埃に目を凝らす

しかし…

「っな！？」

砂埃が晴れたそこに少年の姿はなかった

「…後ろだ木偶の坊……」

「っい！？」

声が聞こえた瞬間に大男はその場から飛び退いた

【ドン！！】

その瞬間に大男のいた場所に金槌の形をした炎が落ちて地面に小型のクレーターを作りあげた

「あぶね！、てめぇ殺す気か！！」

「…っるさぃ…、もっと手加減してほしいの？」

「がぁ！、全力で来やがれぇ！！」

「どっちだっよ……っぅ」

大男の言葉に面倒臭そうに頭をかきながら少年は手を向ける

「の…」

「うぉぁ！！」

【シュ、シャ、ヒュィン！】

気のない言葉と裏腹に大男のいた場所に小さなベクトル型の炎が飛んでいく

「ぅげぇぇ！」

それを見るや大男は受け身を取りながら横に転がる

【ドン！、バン！、ドドン！！】

地面に触れた炎は一瞬だけ強く光を放って爆破した

「…よけんなよ…、【ベクトルフレィ】は威力があんま無いから運が良けりゃ入院して集中治療室に入るくらいですむ…」

少年は表情も変えず手を大男に向ける

「それじゅうしょぉぉぉ！！」

そして大男は再び飛んできた炎を全力で避けだした

【10分後?，，，】

「はぁ…ひぃ……」大男は疲労が溜まっているのか息を乱して動きが鈍る

しかし少年から距離をとりパイプ等が置かれた物陰に身を隠す事を成功させた

「ここまでくればなんとか…」

そして一息ついた時

「勝麻（しょうま）ぁ～♪」

「うぇ゛ぇ゛！！」

いきなりかけられた幼い声に大男改めて勝麻は声にならない声を上げる

その後ろには幼い少女が立っていた

「か、茅野（かや）ぁ～…」

勝麻は少女改め茅野の姿を見て顔を真っ青に染める

「逃げ回んのはよくないぞぉ～V、てか面白くないから、た・た・か・え♪」

そう茅野が言った瞬間
茅野の後ろから突風が吹き出して勝麻の体を物陰から吹き飛ばし地面に叩きつけた

「って！！、いって～…」

そして物陰から出た勝麻の後ろには…

「さて、逃げるのはおしまいか…？」

ニッコリと笑った手を勝麻に向ける少年の姿があった…

「…え、え～っと、つかの事お聞きしますが…、運良くて集中治療室なら最悪運が悪かったら？」

勝麻は真っ青だった顔をさらに青くして半泣きで少年に訪ねる

「死ぬんじゃね？」

少年はあっさりと答えを返した…

「いぃいやぁぁ！！」【ドドン！！】

勝麻の断末魔とともに降り注いだベクトル型の炎が爆発し、砂埃が巻き上がった

「これでここらでの男との喧嘩は１９８戦（うち勝麻との戦闘８３回）１９８勝０敗０分けだねぇ～♪、緋波(ひなみ)強よ～い♪、無敗じゃん♪」

「…相手が弱いだけだ……」

茅野の言葉に少年こと緋波は面倒臭そうに呟き背を向けて歩き出した

が…

「うがぁ！！」

「！！？」

砂埃の中から突然勝麻が殴りかかってきた

【ドン！】

「…っ！」

間一髪で防ぐが緋波の軽い体は勝麻の拳の威力に吹き飛び、木でできた柵に突っ込んだ

「…はぁ、はぁ…どうだってんだ当たりゃこんなもんよ…」

「不意打ちだけどね♪」

「るせぇ！！、手段選んでられるか【ガラ…】……って…、…おいおいそんな華奢な体の癖に立ち上がるか普通…」

壊れて自分を埋めていた柵をどかし緋波はゆっくり立ち上がる

「さすが無駄な馬鹿力とタフネスだな…」

「へ、誉め言葉で受けとっとくぜ…」

【ゴォ！！】

勝麻が言い終わるより早く緋波の手から突如今までよりも赤く大きな炎が燃え上がる

「消し炭にしてやるよ…」

「へ…、一発殴っちまえばこっちのもんなんだよ…」

勝麻も冷や汗をかきながら構えた

…が…

「コラァ！！、あんたらまた人の家の前何やってんの！！」ショートカットの少女が空き地の入り口で怒鳴った

「……っげ…」

【ダッ…】

臨戦態勢だった二人その少女をみて…緋波は顔を歪め勝麻は脱兎のごとく逃げ出した

「はぁ…」

少女は緋波を少しにらんだあと勝麻に目を向ける

そして…

【ガシッ】

「こら…だれが逃げていいなんていった?、勝麻…」

「っひ!?」

遠く離れていたハズの少女が逃げ出した勝麻の肩をつかんでいた

「あんた達が喧嘩しようが入院しようがどうでもいいけど私ん家の隣のここでドンパチやるのやめてくれる!?、うるさいから寝れもしない!、それだけならまだしも人の家の柵突き破るってのはどうなのよ!!」

少女は勝麻の肩を握り潰さん勢いで怒鳴る

「だ、だってよ夜美…、緋波が…」

夜美と呼ばれた少女はさらに勝麻の肩を握りしめる

「言い訳は聞かないわよ!、しかも私に会った瞬間に逃げ出したでしょ!?、男らしくない!、緋波なんて逃げずにじっとして…」

っと夜美が説教している時に

「夜美♪、夜美♪」

「?、なによ茅野」

夜美の肩を茅野叩いて呟いた

「緋波もう逃げたよ?」

「………」

………

「囮作戦成功…」

空き地から少し離れた道路を緋波は歩いていた

「ま…、最初から逃げてもあいつ相手じゃ逃げ切れんだろうし…勝麻には悪いが犠牲になってもらわなきゃな…」

まぁ、悪いなんて思ってねぇけどなどと呟いて緋波は思いっきり背伸びをする

「まぁ、あいつの単純さ利用したら簡単に逃げられるんだけどね…」

「そうよねぇ〜、私単純だし〜♪」

「そうそ……!!!」

【ガコオン!】

夜美の拳が先ほどまで緋波が歩いていた場所にある石の塀をえぐった

「あ…、あっぶね…」

間一髪後ろに飛び退いた緋波は殴りかかって来た夜美をみてため息を吐く

「相変わらず【光渡り】ってのは厄介な能力だな…」そういいながら緋波自分の服をあさくる

「お…、あったあった…」

そして小さなビーズのような光る玉を見つけて指で潰した

潰された玉は小さく砕けて光の粒が生まれ空気中で消えた

「もう光玉はしかけてないんだろ…?」

「あと1890763002個しかけてる」

夜美は笑いながら答える

「嘘つけ…、さすがにそれは気づく…」

「じゃあ相手に手の内は教えない、答えはこれでいい？」

顔は笑っている…

笑って居るのだが泣く子が泡吹いて倒れるような威圧感を夜美は纏っていた

「初めからそう言え…」

そう呟いて緋波はゆっくりと構えた

能力者（後書き）

能力（技、武器、用語）紹介

火炎矢印
（ベクトルフレィ）
矢印型の炎
自由に操作する事が可能
威力は当たって運がよければ集中治療室に入る程度ですむらしい
（勝麻との戦闘では威力をセーブした）

光渡り
（パッセージレイ）
光るビーズ程度の大きさの（大きさはまちまち）玉を相手に付着させる事で付着させた相手の半径十メートル範囲内の情報（高性能レーダーと同じレベル）を知る事ができ
その範囲内になら瞬間的に移動する事ができる

光玉
（こうぎょく）
パッセージレイの発動に必要な球体
硬度はさほどなく潰すと消える

実力者（前書き）

随分遅くなって申し訳ない＞（＿　＿）＜

なかなか書く時間がないもので

大変申し訳ない（～＿～；）

実力者

「お前と喧嘩すんのも久しぶりだな、夜美」

「つい3日前に私の弁当勝手に食べて以来ね…」

呆れたように答える夜美に緋波は「そうだっけ？」っととぼけたように呟いて相変わらず抑揚のない声でつづける

「うん、あれは美味かった、可愛い猫の弁当箱にノリでハート書いてたな、うぁ夜美ちゃんかぁわいぃ〜…」

「ぶん殴る＃！」

その言葉がゴングだったかのように夜美と緋波が同時に動いた

緋波は後ろに飛び、夜美は緋波の立っていた場所に拳を振り下ろす

「月下光天流、閃（ひらめき）！」

そして夜美の拳が地面に触れた瞬間

【ドッッ！！】

その場所が土埃を巻き上げて抉れた

…………

「始まったな…」

戦いを始めた二人を遠くから見る姿が二つ…

ガタイのいい男と小柄な少女が土埃の立つ道路を人様の家の屋根の上から見下ろしていた

「茅野…、お前はどっちが勝つと思う？」

勝麻は戦いから目を話さずに訪ねた

「勝麻はどうおもってるの？♪」

しかし茅野はその質問をそのままに返す

茅野も勝麻と同じで…、こちらは少しワクワクしたように見つめていた

「…緋波が勝つだろ、おそらく…」

「なんで～？♪」

勝麻の答えた言葉に茅野は疑問を投げかける

すでに答えはわかっているようににやけながら

「実際夜美と戦った事はないが、緋波の能力…火炎造形（フレイメイク）は厄介な能

力だ、何度も戦ったからわかる、状況に応じて炎の形を変えられる分普通の火炎使い（フレィマー）や爆発使い（エクスプローダー）より数段タチが悪い…」

何度も対峙して戦ったからこそ

その能力がどれだけタチが悪いのかを勝麻は理解していた

しかし茅野から帰って来たのは意外な言葉だった

「緋波が勝つのは難しいんじゃないかな…？、多分逃げるんだろうけどそれも簡単じゃないと思う…」

「っな…！、マジか…」

茅野の言葉は勝麻を驚かせるのに十分な力を持っていた

冗談で言っているのではないと勝麻もすぐに判断する事ができる

茅野は自信に満ちた声だったのだ…

当の本人は「緋波逃げきれるかな？♪」などと悠長にしているが実力は自分を超える事は勝麻がよく知っている

まぁ、そうが惚れた理由でもあるのだが…

そんな勝麻の気持ちを知ってか知らずか茅野は続ける

「恐らく実力は五分五分、だけど勝麻との戦いで緋波に少なからず消耗とダメージがあるって考えたら七・三で夜美が勝つと思う…」

「マジかよ…」

まるで信じられないと言うような勝麻に茅野はため息を吐いてさらに説明を始める

「勝麻の言った通り緋波の能力の応用力はスバ抜けてるし緋波の運動能力とか判断力がさらに能力の性能（スペック）を数段上げてるのは確かだよ…、それに対して実家が道場でその跡取り娘とはいえ戦闘経験は緋波に全く及ばない夜美がなんで緋波に五分以上の勝負ができるか…、理由は案外簡単だよ…」

「な、なんでだ？」

茅野は勝麻の顔を見て呟いた

「夜美の能力の性能(スペック)が緋波以上だから…」

………

土埃を見ながら緋波は呆れたように呟く

「あ〜ぁ〜、相変わらずだな…、その馬鹿力」

「うるさいわね」

そんな軽口を叩きながら呆れたように抉れた土を見て『あれ当たったら痛いんだろな〜』などと他人事のような事を考えていた緋波が夜美に目を向ける

「閃ねぇ、久しぶりに見たけど威力がだいぶ上がったもんだな…」

「当たり前！、私の能力、光天(レイニング)と月下流を合わせたオリジナル月下光天流よ覚えときなさい！」

満面の笑顔でそう言ってくる夜美

しかし今戦っている幼なじみがその笑顔を見て『ネイミングセンスが微妙だな…』などと思っているとは考えてもいないだろう

「どうでもいいが勝手に流派の名前変えたら親父さんが泣くぞ…」

「大丈夫、ちゃんと月下流の方は師範代だから文句は言われないって〜」

そんな軽口を言い合いながら緋波は先の技の跡をみて苦笑いを浮かべる

『月下光天流、閃…ねぇ、おおかた地面に拳が当たる瞬間に手を光化（体の一部もしくは全体を光にする）させたんだろう、場所さえ指定すりゃ光の速度で殴った訳になるから威力を出すのにほぼ力は必要ない…か…、厄介だな…』

答えがわかってんのに馬鹿力とか罵った自分も十分に厄介だな、とか考えて緋波は再び構える

『怪我させるわけにもいかねぇし…、光化の時間もそんなに長いわけじゃないみたいだ、光玉ももう仕掛けられてないだろうから、チャッチャと逃げるのが一番……か…』

そう考え足に力を入れた時…

「月下光天流、進明（しんめい）…」

【ット…】

夜美の姿が消えた

『！、消え…』

その刹那、緋波は一瞬で背後の気配を感じた

「ばぁ…」

「！！」

後ろにはおどけた夜美が蹴りのモーションに入っていた

緋波は体制をそのままに前に飛び出して回避を試みる

【コッ！】

『っつ…！！、かすった！』

………

「さすが緋波だ！、すんでで前に飛んでダメージを抑えた！」

「…いや…、あれは悪手だよ勝麻…」

「は?、かすっただけだろ！?」

「二撃目は避けれない…」

………

「っつ…」

前に飛んだ緋波は上手く着地してそのまま夜美のいる場所を睨みつける

しかし…

「はぃ、残念…」

「!?」

そこに夜美の姿はなく変わりに背後からナイフを首に突きつけられていた

「ペーパーナイフじゃ人は殺せねぇぞ…」

「まっけおしみ♪、別に殺したいわけじゃないからこれで十分、それに時間的にそろそろ特別演習の時間だし、早く行かないとね」

そう言うなり夜美は屋根に向かって思いっきり叫んだ

「って事だから茅野も勝麻も降りてきなさい!」

どうやら最初から気付いていたようだ…

……

「どうやらバレてたみたいだな」

「はぁ、演習面倒くさいなぁ……」

悪態をつきながらも彼らは約束の待ち合わせ場所に向かうのであった

実力者（後書き）

火炎造形（フレイメイク）

能力者：緋波

炎の型を自由自在に操れる
応用力に優れた能力
型によって炎の性質やスピードが変わる

光天（レイニング）

能力者：夜美

体の一部や全体を一時的に実体ある光に変える事ができ
それによって力や技術に関係なくスピードだけで爆発的な破壊力を
生み出したり瞬時に短距離を移動する事が可能

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2223i/

ブラックスキル

2010年10月28日05時37分発行